

1919 年 8 月 20 日

これまでのどの親睦会においても、体操チームの精神の発露が見られ、相互のよき理解がつねに新たになされた。ここでまたその証しとして、われらが模範演技者にして体操コーチヘルマン・ルフの誕生パーティーがある。8 月 8 日の朝、オイヒラー、フェルヒネロウスキー、ムックスからなる第一チームの代表が彼にチームからの祝辞を贈り、板東での体操の日々を記念して一冊のアルバムと花束を手渡した。フェルヒネロウスキーは、アルバムの中でチームの各メンバーの特徴を描こうという考えを持っていたのだが、彼の詩の中ではこの考えが見事に実現されていた。この詩にはさらにムッテルゼーによって必要な素描が添えられたが、これまた非常にすぐれた成果を挙げているところがあると言わねばならない。アルバムの内容を皆のために保存するため、われらの模範演技者〔ルフ〕は喜んでこのアルバムを使わせてくれた。以下にその内容を提示しよう。

ここに示す言葉と絵によって

われらの体操を君のため描きたい。

戦争中、第一チームの 14 人によって

体操がどんなになされたかを。

君はわれらの指導者として

個々のメンバーの悪癖を知っていよう。

それゆえこの記録をよく読むべし。

十分に楽しめるだろうから。

ムックスというのは、チームの中で
一番のっぽの男である。

筋肉隆々ですらりとした体躯だ。

彼は高い平行棒に大腿部を
したたかぶつけるのである。

グレイの髪をしたこの男は。

しかしほんの少しの練習でも

彼にはいつも最大の苦痛だ。

「開脚姿勢なんて死ぬほど嫌だ」

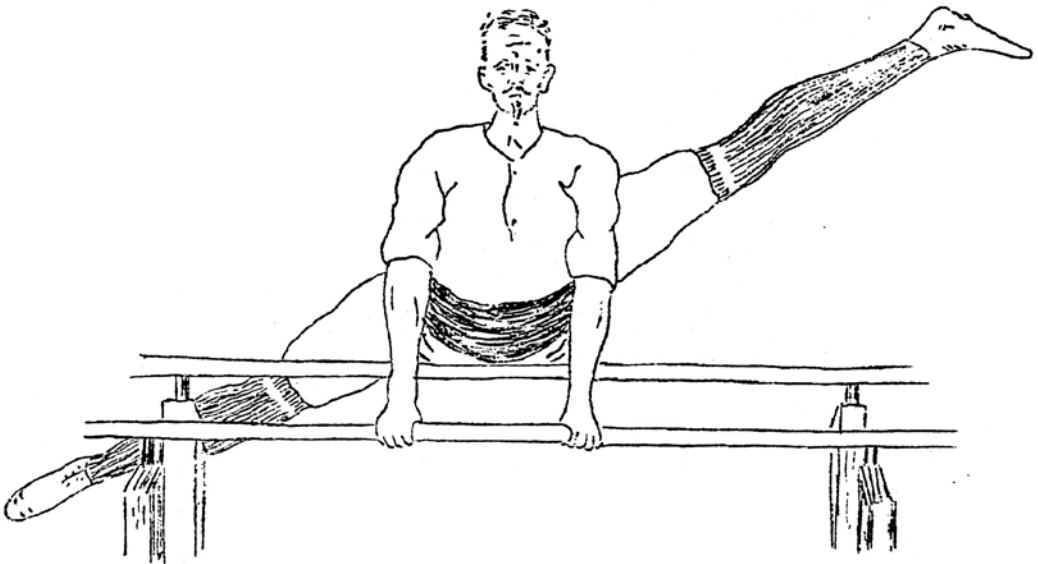
と友人レッチェに言ったことがある。

「こんなもの誰が考え出したんだ」と。

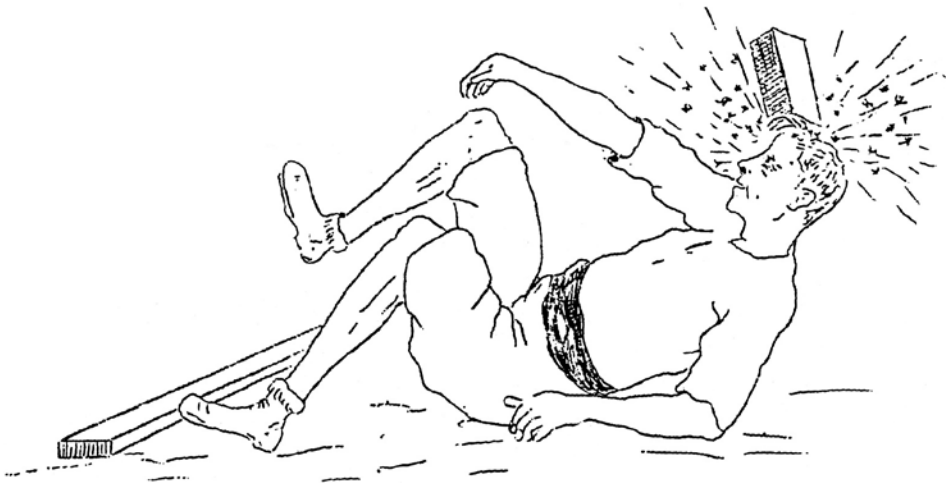
こんな不平を言ったこともある。

「おい、本音を言ってくれ。

軽業師になれって言うのか」



「体操のあとはしたたかのどが渴くな」
とフランツ・フォラントはよく思う。
チームの柔軟曲芸師であるこの男は、
しょっちゅう大酒を飲む。
まずは酔っ払わないことには、
眠ることもできないほどだ。
グラスを合わせて乾杯のときはこう思う。
「こんなふうに歌わせてほしいものだ。
澆刺と、敬虔に、明朗に、自由に飲めば、
体操家はいつも本物だ。」
そんな時、彼はたいてい忘れていて、
アサヒビールを飲んだ後で、
彼が石を遠くへ投げようとする、
チームのメンバーたちは鉛みたいなもんだ。



体操して酒飲んで、レスリングにボクシング、
 それからまだ詩をくそ勉強するなんて、
 ひとりの人間がやるには多すぎる。
 そんなことができるやつを見てみたい。
 だが、この国のバンドーという町の
 あのクレメンスを知らぬ者はない。
 この男、何が出てこようがお構いなしで、
 あっという間にコツを飲み込んでしまう。

テニス、サッカー、シュラークバルをやっても
 彼は最高の到達点へといたるのだ。

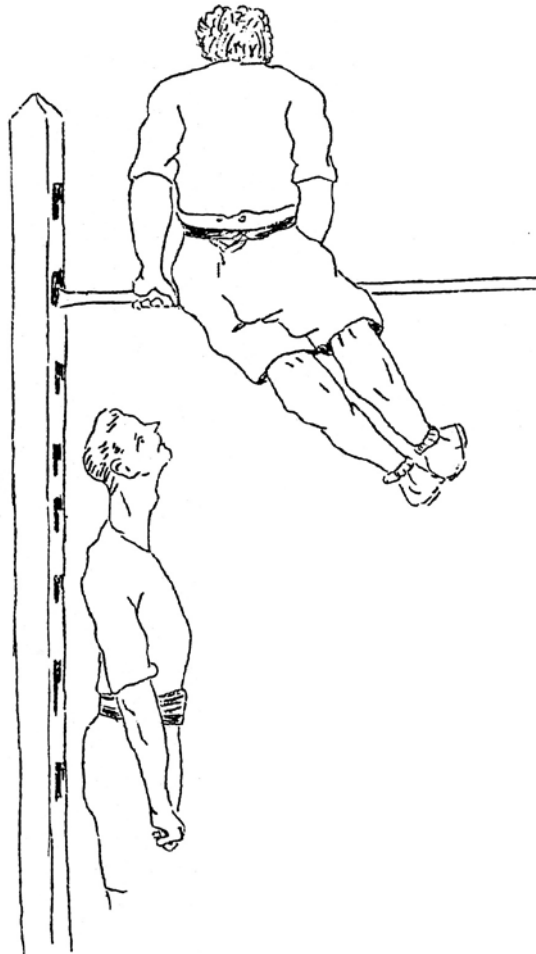
ヴァイオリン、コントラバス、
 マンドリンもいけるし、
 二日酔いをも甘受する。

だが、こんなにすごい才能があっても、
 ひとつのことはいまだうまくいかない。
 倒立ができないのだ。
 いつもくずおれてしまうので。



高い鉄棒で気分が乗ってくると
オイヒラーはいつも自由に演技する。
しっかりと大きな弧をつくって
スイングし、
とても大胆に体側跳び越しをする。
ただし鞍馬で両脚開閉シザースのときは、
いまだに取っ手が邪魔をする。

しかし、手と膝を捻挫していても
体操家たるもの泣き言は言わない。
彼の演説はいつも活気にあふれ、
誰をもしっかりと感激させられる。
まるで父親のように労をいとわず
チームの和合を気にかけている。



あそこに厳肅な顔をして
高いトランポリンの前に

立つのは誰だろう。

あの開脚跳びをやったのけた
屈強な勇士のヴォルフではないか。
激情に駆られた様子で

器械の前にいる。

その表情からは読み取れない。
演技の困難なプロセスを前に

わくわくしているのか不安なのか。

何か思い通りにならないことがある。

そんなとき、彼は黙ったまま

憤激する。

「今一度」とそれから彼は言う。

「本当に出来ないかどうか

やってみよう。」

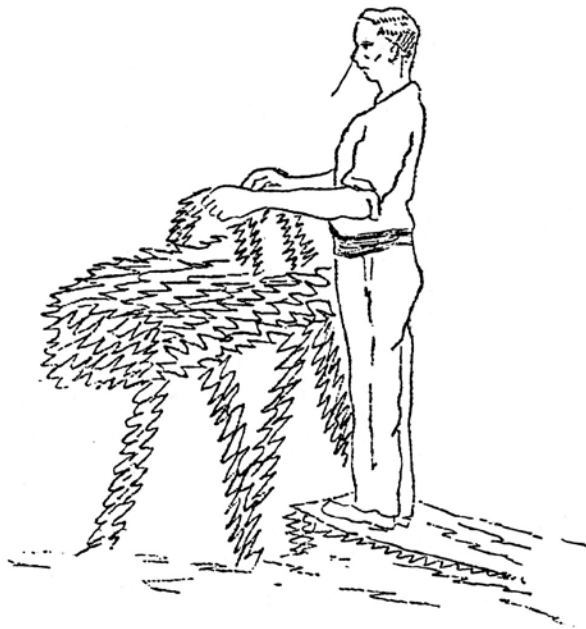
そうして体操と跳躍をする。

それがうまくいかないときは

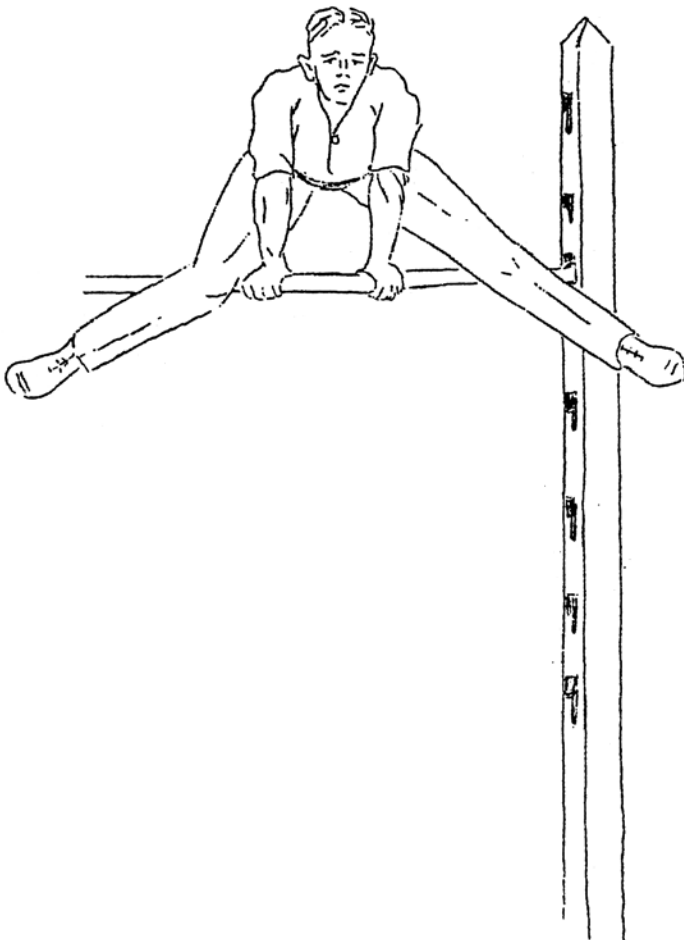
禍なるかな。

彼の触れるすべてのものが振動する。

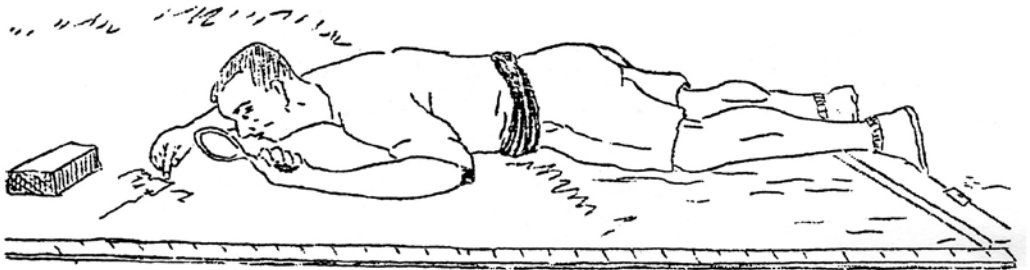
鞍馬も平行棒もガタピシと鳴る。



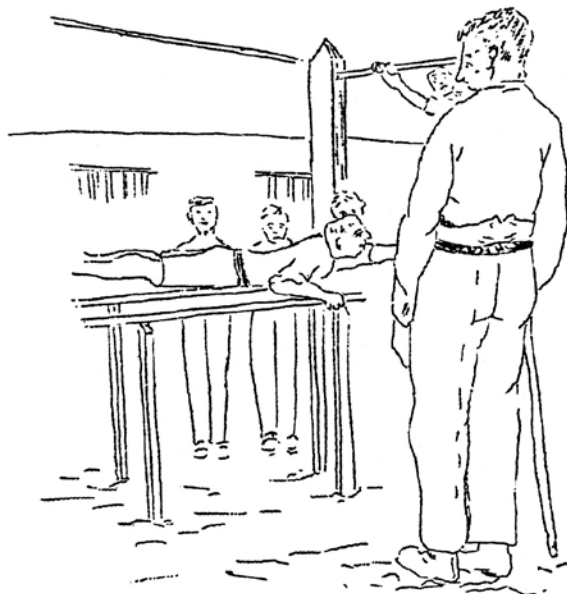
フレンダーはたくましいやつだ。 跳んだり走ったり、なんと
 だが彼はよく変になる。 辛いことか。
 目前に技比べがない場合には、 これは実際彼には当てはまらない。
 鉄棒でまったく堅実な演技をする。 なぜなら両脚がうまくついてこず、
 軽々と大胆きわまりなく いつも逆方向に行ってしまうから。
 いかなる動きもうまくやってのける。だが人生なんてそんなもので、
 しかし「開脚跳び」のときには 誰にでもそんなことはなかった
 いつも だろうか。
 膝を曲げてしまうのだ。 ある者がちゃんと走って跳躍すれば、
 別の者はおかしなやり方で
 それをやる。



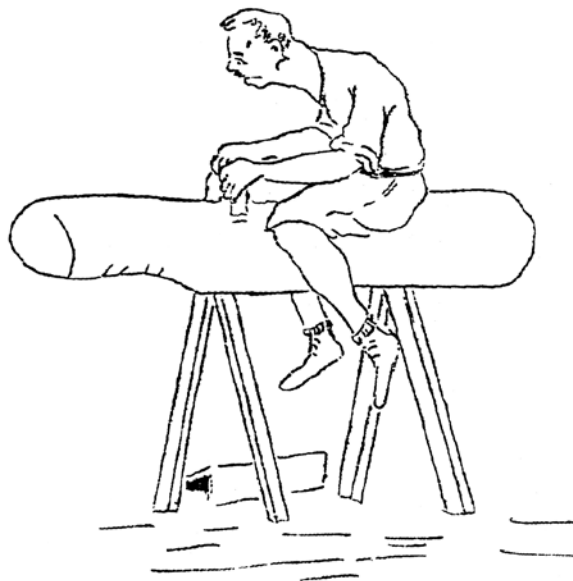
フェッターの体操もますますうまくなる。
 まことに演技が好きでどんどんこなす。
 途方もない技の波を
 死に物狂いですばやくやってゆく。
 両脚開脚（シザース）も大車輪【? Kreiskehren】も
 今彼の演技でそのすばらしさが示される。
 しかし彼は石を手取る。
 それから、愛する祖国におさらばだ。
 だから彼は、12 種競技で必ずしも
 最高賞を得ようと努力することはできない。
 彼が器械体操で取った
 最高の点数にもかかわらずだ。---



体操のときにはいつもいる
われらがスポーツの天才はどこだ。
いつも大笑いして、けっして退屈を
かこつことのない、われらがクッデルは。
そう、彼らはホッケー競技のさいに
われらの五月のために目標を立てた。
彼は今、いつも元気よく楽しげに、
ここの医務室で静かに横たわる。
熱い七月の日々、
彼の膝は傷つけられたのだ。
彼の運命は喜びもなく、きびしく深刻だ。
けれども彼のまなざしはなお笑っている。
おそらくこれも長くは続くまい。
われわれ皆が彼のことを悲しんでいるから。
そのうち荒っぽい跳躍で、
彼は体操場をとびはねるだろう。

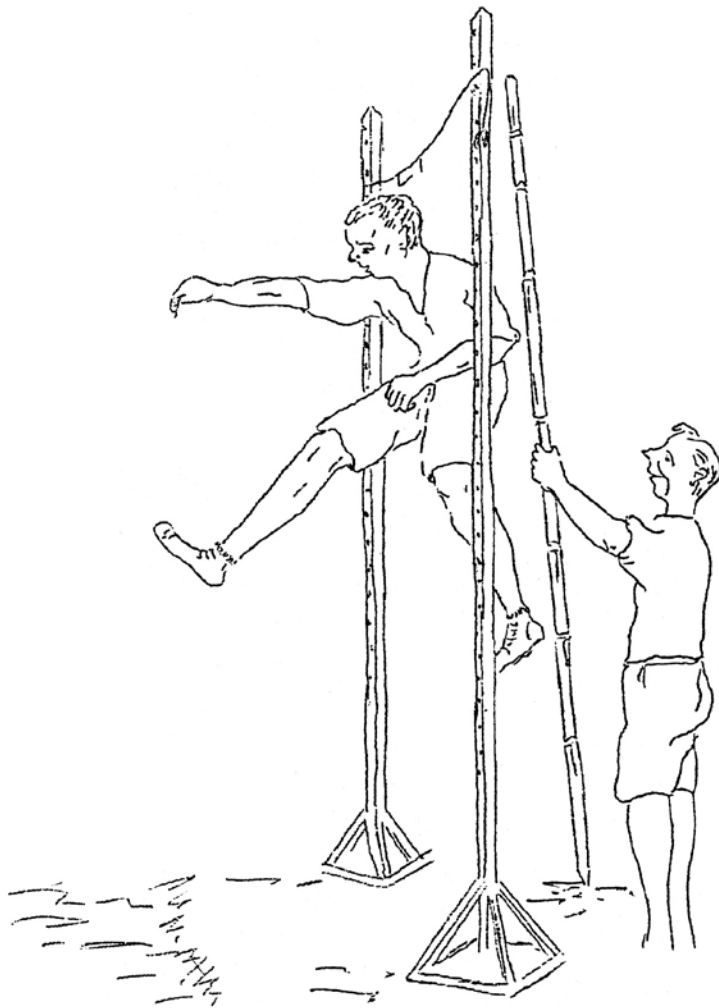


あそこのお粗末な鞍馬で体操するのは誰だ。
あんなに怠惰に練習をしているやつは。
鞍馬はそれほどつらいものなのか。
ベーヴィング殿、答えるがよい。
ずっとスイングをやっていたら、
それだけでもう成功するのでは。
君は騎兵隊で勤務したことはないが、
そんなこと考えなくていいのだ。
毎回の練習は些細なものだろうが、
繰り返しやらねばならないのだ。
いつか体操というものを理解したいなら、
取り組む態度に注目すべきだからだ。
だが君は、これからずっと先、
いつも心底喜んで体操するだろう。
だから上のことをすぐに学ぶがよい。
いつか爺さんになる前に。

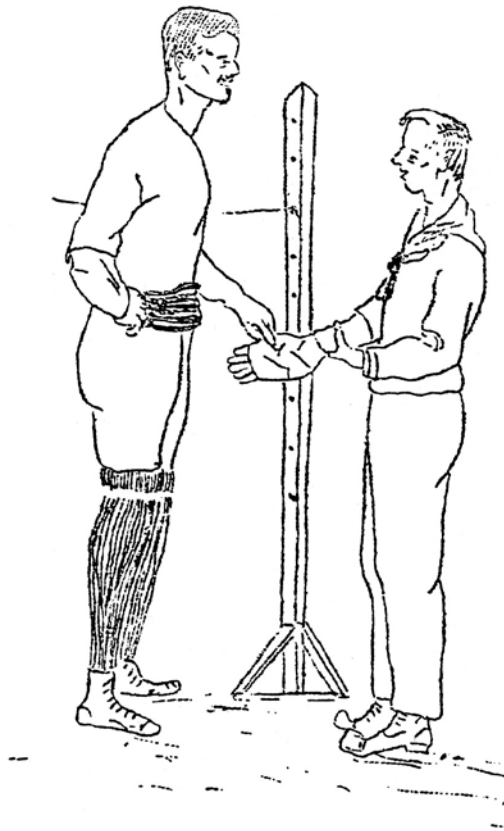


ハンスは、微笑みながら小股で
体操器械へと近づいてゆく。
まったく軽々と、優雅に
高跳びの棒を手取る。
今、ちょっとした助走をとると、
もうハンスが来るのが見える。

きれいに棒を前に掲げている。
まるでトルコの銃剣のように。
さあ地面を突いて同時に跳躍だ。
するとハンスは少し青ざめる。
大きな弧を描いて前向きに
3メートル跳ぶ。一嘘ではない。



君を見ると一親愛なるパワーよ。 だが、体操の精神は不変だ。
 すぐに少々ぞっとする。 体操の国ではそうなのだ。
 敵国で捻挫した 君の関節は、すぐに治るだろう。
 君の手のことを思うとね。 さすれば君は戻ってくるだろう。
 君は以前まだ活動的だった。 そしたら君は朝も晩も
 残念ながら今は引っ込みがちだ。 うるわしき器械で体操せねばならぬ。



あそこで夜、月明かりのもとで
熱心に鉄棒をしているのは誰だ。

ヴァステル、あのバイアーでは

ないか。

ただ、器械から離れるときには
変なことも露呈する。

跳躍があまりにぎこちなく

いいかげんだ。

皆はレッテルマイアーと呼んでいる。まるで年老いた馬車馬みたいに。

そう、彼だ。幻覚ではない。

「こん畜生」と彼は言う。「えーと

ボーリング場のヴァステルで、

滑り止め粉はないか。」—

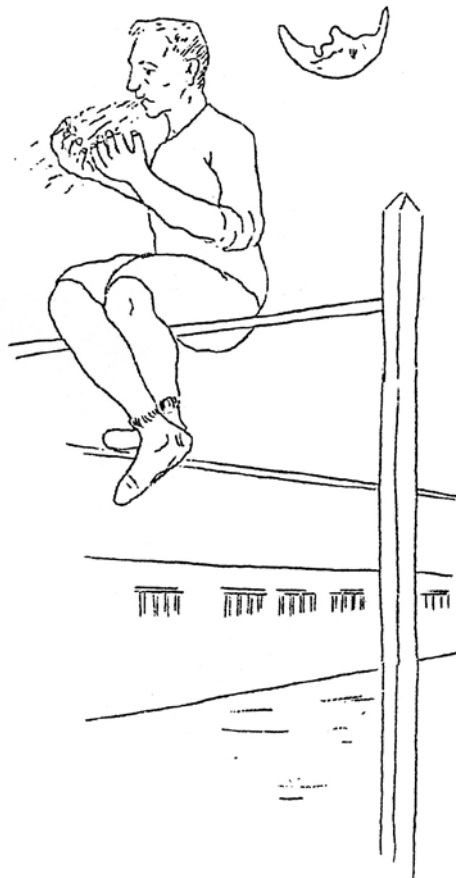
彼は「上達」ということにいつも

「手がつるつるすべるんだ。」

夢中で、

ちゅっ、ぺっ。これが最良の助言だ。

器械の長さや幅が気になるのだ。



ハンネス・ケーラーも熱心に

体操してるが、

残念ながら間違いもある。

前に逆立ちができたとき、

膝がまっすぐ伸びていなかったのだ。

しかし跳躍はうまいもので

力と勇気を大いに見せてくれる。

三段跳び、幅跳び、高跳びを

苦もなく

朝も早くからしばしばやっている。

土曜日もよくひとりで

体操場で一石の投擲だ。

「だれも来ない。」と低い声で言う。

「そんなのは体操家の流儀では

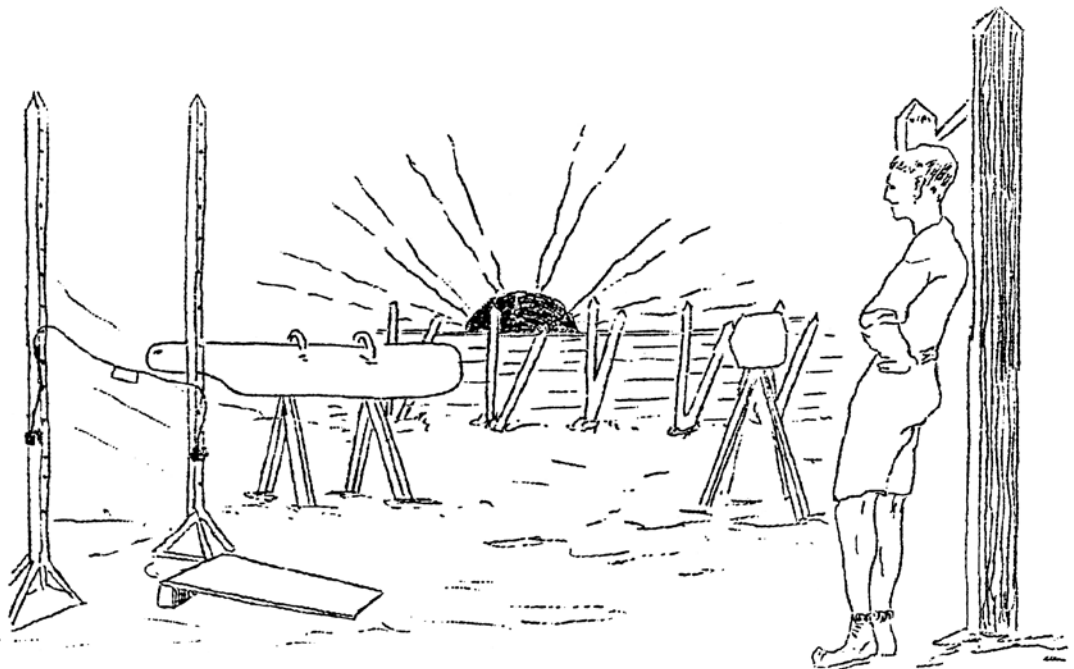
ないな。」

「君らはぐうたら団だ。

体操場が土曜日は空っぽで、

もう体操家の姿がないなんて、

実に恥ずかしいことだ。」



君のよき導きで

体操がここで広まった。

ドイツ的な統一性と男の力が

楽しく育成され、つくられる。

われらは皆多くを学んだだろう。

美しい平和のホールで。

鞍馬での練習こそは、

われわれ皆に何がしか価値があった。いかなるときも、この贈り物が

友情がわれらを固く結んだ。

練習のすばらしい折々に。

あそこですべての悩みを忘れた。

そこでは団結が支配していたから。

それゆえ君に感謝する。愛する

ヘルマンよ。

君は真の体操人だ。

君に喜びをもたらさんことを。



不屈の勤勉と団結をもって
 ここ日本でしっかり学んだ

そのときドイツの領土は秩序を得て、
 貪欲な敵は一掃される。

ことにより、それゆえ鉄の絆をしかと結べ。

われらは困窮と危険を突破しよう。 体操家たちへ。互いに手を
 いつしかわれらが白髪になるまで。

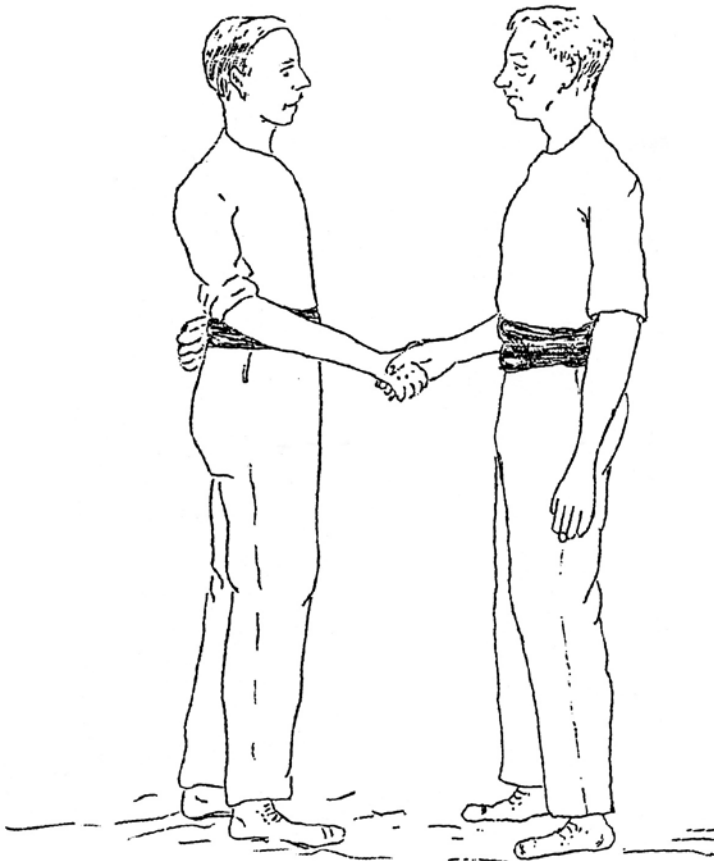
差し伸べよ。

やがて平和のときが近づけば、

苦難のときもくじけず、

仕事で蒔かれた種は収穫される。

死ぬまで誠実であることを誓え。



われわれは、酔っ払ってのお祝いはもう欲しがるまいと決めていたのであるが、われらの体操コーチの誕生日を歌や音楽なしですますことはやはりできなかった。場所とビールの問題は即座に解決して、われわれはその晩にはもう音楽練習用の小屋にすわって、1時まで休暇を楽しんだ。そうした機会にはもうお定まりになっていたのだが、われわれはおなじみのいくつかの歌をうたい、あることないこと大口をたたき、陽気さは小屋に満ち溢れた。しかし楽しい気分にもかかわらず、これまでのお祝いには付き物だった魅力が今回は少し減ったような印象はぬぐえなかった。そのようなお祭り騒ぎではなんだか忘却を皆が求めているような気がしたぐらいだ。それは、われわれをもう数年前から取り巻いているものの忘却である。この期間に命を奪われた不幸な者たちの姿を呪縛することであり、日々未来や故郷の出来事に関わる考えを追い払うことである【この zu 不定詞句が vergessen の内容なのか suchen の対象なのかが問題】。この点で私が思い違いをしていないとすれば、これらすべての陰鬱な考えを、わずかな時間なりとも追い払い、われわれが運命によってこれまで騙し取られていた時間の償いを見出すことがうまくできているならば、それは望ましいことであらう。

そうであるならば、われわれのお祝いは、身体的にも精神的にも癒してあったと断言してもよいだろう。しかし、この推測において私が思い違いをしていたとすれば、そちらの方がよいであろう。というのも、その場合には次のような確信が保持されるからである。すなわち、無気力無関心を増大させる鉄条網病からわれわれはまだ影響を受けていなくて、心の支えとして、また身を持する力として、特別なお祝いとの結びつきがなくてもわれわれの体操だけでもう十分なのだという確信である。

第二チームの幹部たちは、8月11日の月曜日、板東での最初のヤーン祭の一周年記念日に集まって、この日を昨年と同じような趣旨で祝おうと決めていた。何度も言及したピアノ小屋は、この目的のためににぎにぎしく飾られ、ヤーンの新しい肖像画が掛けられた。7時30分、「チーム最年長者」のエーミール・ヤンツェンがツイッターで澁刺と行進曲が奏でられる中、この夕べの開始を宣言した。活動的な体操家たちの他、すべての潜在的メンバーや第二チームから出た第一チームの体操家たち、模範演技者も招待されていた。招待された人々がお祝いの場から持ち帰った印象によれば、このチームでも同様にかなり和気藹々とした関係が発展していると考えてよさそうだった。第一チームの精神は、第二チームにも根を張っているようだ。けれども社交の場においてのみならず、残念ながら事故に関してもそうなのだ。そのためチームの模範演技者のひとはスピーチの中で、第一チームの体操能力にのみ認めたい忠実な模倣を禁じた。なぜならその方が有益だから、というのである。ツイッターの演奏と歌と諸々の講演で、時間はすぐに過ぎ、終りを告げるトランペットの音が早すぎだと今回も皆は感じた。

われわれの帰国の旅がいつはじまるかわからないので、本をまだ収容所にいるうちに完成させるため、われわれの体操活動に関する記録を終了せざるをえなくなった。【151】10月2日に予定されている民俗的な競技会と、その他言及に値する出来事の経過については、必要に応じて後ほどまた報告するつもりである。

この本は 20 部のみ印刷され、われわれの収容所生活の最後まで体操をおこなった人々のために書かれた。われわれを相互に親密にさせ、捕虜生活の多くの時間をすごしやすいものに思わせたすべての出来事が、ここに記録されている。われわれの仲間とはあまり縁のなかった読者や、板東収容所でどのように体操がおこなわれたかを知りたい読者、この本をただ楽しみのためだけに読む読者もいるだろう。そのような読者はおそらくいくつかの箇所や詩を読むさいに、いぶかしげに頭を振り、多くのことが、それどころかほとんどのことが理解できず、それを 5 年間の収容所生活のせいにするであろう。それに対してここで述べておきたいことは、われわれはまったく見ず知らずだったのが体操の場で出会い、はじめは浅く、それから深く知り合うようになった。そのことの証しとなるのがわれわれの提示した詩で、そこからわれわれは個々のメンバーに対して、また全員に対しての作者たちの導きと影響力を最もよく認識することができる。これらの詩が韻律上の厄介さをどんなに多く示さねばならないとしても、それによってこの詩を読むわれわれの楽しみは少しも損なわれないであろう。というのも、われわれにとって喜びと感激の源であり、友情と団結を作り出したのはこの詩であったということが少なからず言えるからである。

これからの時代に新しい種が芽を出すことができるように、この二つの美德（友情と団結）が故郷においてもかつての意味と力を再び得ることを願う。われわれの仲間の中で育まれた団結と友情の精神が、この本から語りかけているのと同じ程度に、われわれ皆を故郷においても支えつづけ、同じ気持ちでさらなる活動をおこなう力を授けてくれますように。

ゲート・ハイル！

板東、1919 年 9 月。